

訂改
高等女學讀本
卷三

3759
Da20
資料室

42137

教科書文庫

4
810
42-1916
200030
1961

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

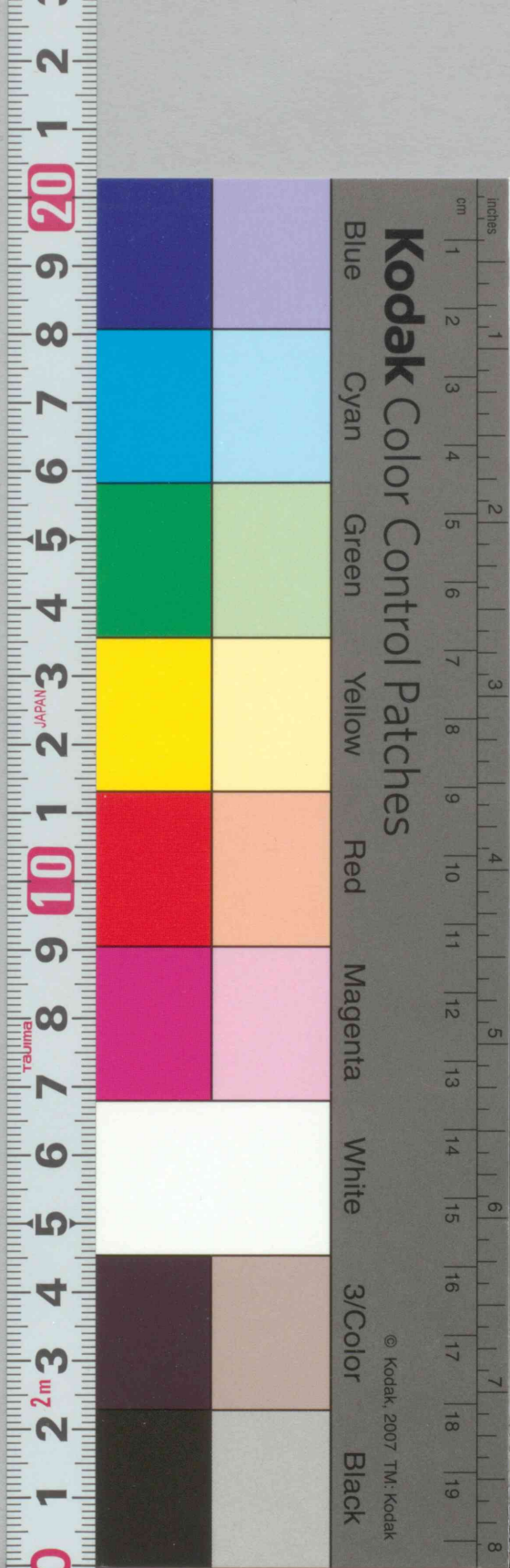
C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Sa20

資料室

日二十二月一年五正大

濟定檢省部文

用科語國校學女等高

佐藤 球
鹽井 正男
共編

訂改 高等女學讀本

東京 株式會社 明治書院



訂改 高等女學讀本卷三目次

一、	畝傍の山陵……………	一
二、	吉野の花……………	四
三、	錦の直垂 その一……………	九
四、	錦の直垂 その二……………	一四
五、	燕の歌 (韻文)……………	二〇
六、	生存競争 (口語文)……………	二二
七、	諭言五則……………	二九
八、	博物館見物に誘ふ文 (書簡文)……………	三二

目次



九、	茶の湯と生花	三四
一〇、	西洋の家庭 (口語文)	三九
一一、	眞の接待ぶり	四四
一二、	心の寶	四九
一三、	藤樹先生 その一	五一
一四、	藤樹先生 その二	五四
一五、	格言	六〇
一六、	安宅	六一
一七、	征衣上途 (口語文)	六九
一八、	北白川宮能久親王殿下 その一	七五
一九、	北白川宮能久親王殿下 その二	七九

二〇、	家の紋 (口語文)	八四
二一、	美しき自然 (韻文)	八七
二二、	龍華寺の眺望	九〇
二三、	富士山の頂上	九五
二四、	富士の嶺 (短歌)	一〇一
二五、	鎖夏日記	一〇二
二六、	雑草	一〇八
二七、	豊太閤の逸話	一一一
二八、	秋 蟬 (韻文)	一一七
二九、	秋の夜	一二八
三〇、	小園の萩	一二一

三一、 暴風見舞の文 同返事 (書簡文) 一二五

三二、 太古の洪水 その一 (口語文) 一二九

三三、 太古の洪水 その二 (口語文) 一三五

三四、 水は萬物の慈母 一四〇

三五、 瀬戸内海 一四三

三六、 愛郷心 一四七

卷三目次終

改訂高等女學讀本卷三

一、 畝傍の山陵

畝傍山の東北の地數町をトして、瑞籬いと貴く結ひ廻したるは、神武天皇の御陵なり。われら旅衣の塵打ち拂ひて御前に額づく。おもふ昔、天皇、天祖の遺訓を奉じて、天業を朧め皇基を定め給ひしより、今に至るまで殆ど三千年。君臣の分あきらかに、父子の親厚く、世界に比類なきこの一大帝國を成し給へり。われ

畝傍山
大和國高市郡
白樺村の中央
に特起す。

らこの國に生まれ、この君の御流を奉じて、この土に生育する者、この御陵を拜して、いかでか限なき感慨胸に溢れざらん。拜し終はりて、伴なる者のよめる。

古をしのぶ袂に通ひけり、

畝傍の山の峯の松風。

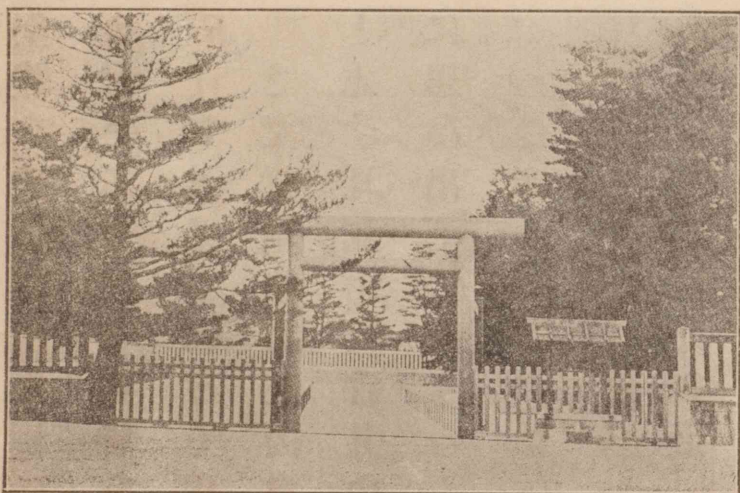
おのれも、

畏くも額づく袖に散りにけり、

畝傍の山の松の下露。

などいひて、やうやうに御前を退く。

そもそも中古以來、王室衰へさせ給ひてよりは、歴



代の帝陵定かならざるもの多かりしのみか、この御陵さへ殆ど知られざる程にて、里人はここを「じんむ田」などと唱へ居たりとなん。さるに王政古に復りてより、今はかくめでたくしなさせ給ひしかば、何の思ふ事もなけれども、なほ隴を得て蜀を望む人情よりいはんに、この畝傍山の

全體を悉く取り入れて、瑞籬廣く結ひめぐらさばいかに。さるは伊勢の神宮と相並びて、その神神しさも一しほまさりぬべく思へばなり。

さて綏靖・安寧二天皇の御陵を拜みて、長谷の方へと志す。耳無山・天香具山右左に見ゆ。古きことなど更に思ひ出でて語り合ふ。夜になりて、観音の前なる宿につきぬ。(落合直文「萩之家遺稿」)

二、吉野の花

雨を冒して六田に著けば、前には吉野川おもしろ

長谷

大和國磯城郡初瀬村長谷觀音。

耳無山

同郡耳成村にあり。

天香具山

同郡香具山村にあり。

冒一冒

つづらをり
(葛折)

く流れたり。一里ばかり川添の道をのぼり、上市を過ぎて、山路にかかる。山やうやう深うなりて、雨雲やうやうに分れそめぬ。やがて、見ゆるかぎりは櫻になりぬ。つづらをりの路をのこして、左右前後花ならぬはなし。

登りつむれば茶屋あり。ここより見下すを一目千本といふ。満山の櫻花、見る見る夕暮の色に包まれ行くさま、えも言はずおもしろし。

吉野町に宿る。明くれば雨全くやみぬ。まづ二王門を入る。藏王堂の前に四本の櫻あり。傳へいふ、大塔の

宮の今はの御宴を開かせ給ひし跡なりと。花ものいはず、朝の露しきりに袂に落つ。

吉水院に詣づ。ここは南朝の假御所にて、神さびたる玉座、由緒ある寶物、坐に千載の恨を残せり。

また、もとの路に出でて谷に下る。このあたり花いよいよ深く、鶯しきりに啼きかはしたり。たたずみては顧み、休みては仰ぎ見つつ、行くともなく行くまゝに、路盡きて堂の前の門に入る。ここぞ、正行が鏃もて「かへらじ」の歌をとどめし如意輪堂なる。石の階を上れば、右に後醍醐天皇の御陵あり。落花、青苔の上に亂

たたずむ
(佇)

やじり(鏃)

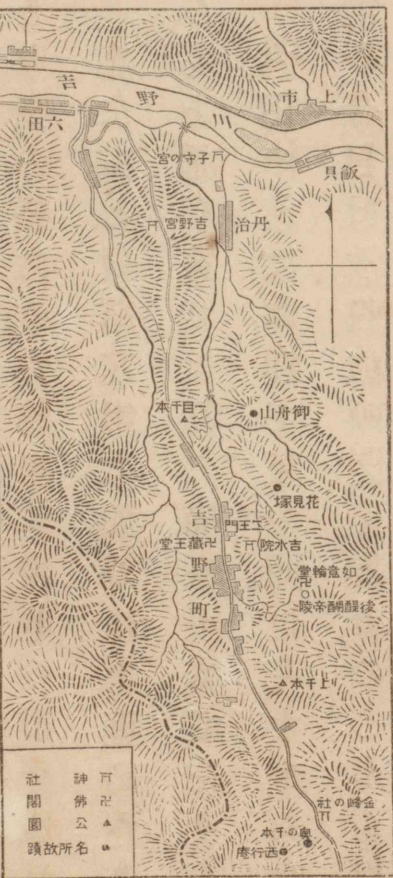
かへらじの
歌

「かへらじとか
ねて思へば梓
弓なき數にい

る名をぞとど
むる」

れしきて、今朝はまだ掃はぬさまなり。

同じ路を少しくかへりて、花の中道をなほ深くの



ぼる。雲井
櫻のあた
りに茶屋
あり。そこ
より見わ

たせば、過ぎ來し處ただ一目なり。吉野町藏王堂、花の雲に包まれてまがふべくもあらず。吉野川もあざやかに流を見せたり。

庵 菴 菴

子守の社を拜みて、金峰の社に詣づ。これより右に細道を入りて、奥の千本西行庵に著きぬ。櫻の数は多からねど、浮世の外の色香また捨つべからず。山彦ひとり鶯の聲にこたふるも寂し。

宿に歸れば、落花雪の如く縁を埋めたり。なほひらひらと飛び來ては、帽の廂をうちてやまず。

うるほふ
(滬)

六田の渡に向ひて下る。同じ花ながら、昨日は雨に滬ひ、今日は夕日に映えて、趣おのづから異なり。名残は盡きねど、山路は盡きて、吉野川の岸に出づ。舟に乗りて見返れば、花は幾重の雲にかくれぬ。川ぞひの菜

の花の上に、夕日の影淡く残りて、おち來る雲雀の聲もいとあはれなり。(大和田建樹「雪月花」)

三、錦の直垂 その一

元弘三年、大塔宮護良親王の吉野に立て籠らせ給ふや、北條高時の部將二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎を率ゐてこれを攻む。菜摘川の畔より、遙に城の方を見上ぐれば、嶺には旗幟風に翻りて雲のた靡くが如く、麓には兵仗日に輝きて星のきらめくに異ならず。戦端忽に開かれ、交戦七晝夜、兩軍の死傷幾何とい

護良親王
後醍醐天皇の
第三皇子
菜摘川
大和國吉野
郡。

えらぶ(選)

ふ數を知らず。鮮血草を染め、尸屍路に横たはれり。
吉野の執行岩菊丸、東軍の嚮導として陣中にあり。
部下百五十人を選び、夜に紛れて、密に後の山に忍び
入り、火を放ちて攻め戦ふ。城兵前後に敵を受け、今は
防ぎ戦はん術もあらねば、早やこれまでぞと、皆死を
決して敵を衝く。

うしなうて
(失ひて)

大塔宮も親ら敵中に驅け入りて、東西に切り靡け、
南北に薙ぎ拂ひ給へば、敵兵は度を失うて、やや遠く
遁れ走る。宮藏王堂の大庭に引き還し給ひ、早くも御
覺悟を定めさせられ、酒を召して最後の宴をぞ開か

せ給ふ。

かひな(腕)

敵の征矢御鎧に立てるもの七筋、御腕にも御顔に
も各二箇所の御傷あり。鮮血流れて淋漓たり。宮、矢を
も抜かせ給はず、血をも拭はせ給はず、大盃を把つて
傾け給ふこと三度、御英氣溢るるばかりなり。時に木
寺相模、四尺三寸の太刀の鋒先に敵の首を差し貫き、
宮の御前に出でて、聲高らかに謠ひ且つ舞ふ。節は沈
痛、調は悲壯、一座慨然として悲憤の涙を灑がざるは
なし。

時に村上義光追手に在り、鎬を削りて戦ひけるが、

衆寡遂に敵せず、鎧に立つたる矢十六筋、折りかけた
るままに、急ぎ宮の御前に馳せ來り、

「一の木戸は甲斐なくもうち破られ、敵は間近に攻
め寄せて候。所詮支へ防がんこと協ひ候はず。敵の
勢を餘所へ廻し候はぬうち、疾く一方を打ち破つ
て落ちさせ給ふべし。但し、跡に残りて戦ふものな
くんば、敵はそれと心得て、いづくまでも追ひ驅け
參らせん。恐多くは候へども、某御諱を冒し奉り、御
命に代りて此處にて討死仕らん。疾く疾く錦の御
直垂と御物具とを下し賜はるべし。」

やぶ。つて
(破りて)

宮聞し召されて、御首を打ち掉らせ給ひ、

「いかでさることあるべきぞ。一所にこそともかく
もなるべけれ。」

と、股肱の臣を惜しみて聽させ給はず。

かくては果てじと、義光態と言葉荒らかに諫めま
ゐらせつつ、進み寄りて御鎧の上帶を釋き奉る。宮御
感淺からず、御涙ながらに御物具、御直垂を脱ぎ替へ
させ給ふ。

うは。ちび
(上帶)

「我が爲にかかる忠臣を捨てんこそ悲しけれ。幸に
生き残りたらば、厚く汝の後生を弔はん。若し又敵

の手に掛らば、同じ冥途の衢に伴はんずるぞ。さらばぞ、義光。」

御名殘惜しげに、見返り見返り落ちさせ給ふ。

四、錦の直垂 その二

義光「今は心安し」と、宮の御直垂を著し、御鎧を纏ひ、急ぎ二の木戸へと取つて返す。折しも息喘き馳せ來る若武者あり。これぞ一子義隆。時に年十八、武勇をさをさ父に劣らず。

「父上宮の御身に代らせ給ふものを、某争で一人御

を
ち
を
ち

後に命ながらへ候はん。父子與に忠義の鬼とならんと存じてこそ參り候へ。」

父は主に代り、子は父に殉せんとす。義光深く心に感じ、熱涙胸に迫りて暫しは聲も出でず。ややありて、

「父子の義重しと雖も、主従の義は更に重きぞ。宮此處を落ちさせ給へど、御先途いと心もとなし。暫く父に殉はん命を存へて、宮の御爲に捨て奉らんこと、これ主への忠、父への孝ぞ。未だ遠くは落ちさせ給ふまじ、疾く疾く追ひ付き奉れ。」

言葉靜にいひ諭せば、義隆げにもと覺えけん、さらば

とばかり、いさぎよく父に別れて、急ぎ宮の御跡を追ひ奉る。子を返すも忠のため、父に別るるも忠のため、忠こそ人の命なれ。

すなはち
(乃)

義光乃ち高櫓の上に駆け上り、目を舉げて宮の御後姿を見送り奉れば、勝手明神の前を南へと落ちさせたまふ。義光今はかくこそと、櫓の狭間の板を切つて落し、身をあらはにして大聲に呼ばはりけり。

「如何に東夷ども、よく承はれ。今上天皇第三の皇子一品護良、逆臣のために亡されて、唯今此處にて自害せんずるぞ。この有様を見置きて、汝等が武運忽

よろひ(鎧)

に盡きて腹切らん時の手本にせよや。」

鎧を脱ぎて櫓より投げ落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに膚おし脱ぎ、刀を取つて左の脇に突きたて、きりりと右の脇まで一文字にかき切り、腸を掴み出して、さつとばかりに櫓の板に投げつけ、太刀を口に啣へて俯伏しに打ち伏す。

追手搦手の寄手かくと見るより、

「すはや、大塔宮の御自害ぞ、われ御首を賜はらん。」
われ先にと二の木戸におし寄せ來り、四方の圍忽に解く。宮はこの隙に天の河の方へと落ちさせ給ふ。

岩菊丸の部下五百餘騎兼て案内を知りたれば、宮の落ちさせ給ふと見るより、その遁路を塞ぎてうち留め奉らんと、太刀を抜き連れて追ひ掛け來る。義隆既に御供の列に在り。ただ一人踏み止まり、奮然として寄せ來る敵に立ち向ふ。

さいはひ
(幸)

幸にして道幅は狭し、二人とだに並び進むこと協はず。義隆乃ち太刀を揮つて道の真中に立ち塞がり、來る敵も來る敵も皆斫つて仆し、或は首を刎ね、或は足を拂ふ。敵多しと雖も、唯一人の義隆に支へられて、暫しは進むべくもあらず。

たばら
(たばら)

高野山
紀伊國伊都
郡

義隆氣節石の如く、能く強敵を遮り得たりと雖も、身金鐵にあらねば、矢傷刀傷あまた身に負ひて、遂に戦はん力も盡き、躍つて小笹の中に入り、自ら腹搔つさばいて死す。

宮はこの隙に虎口を遁れさせ給ひ、終に高野山へぞ入らせ給ふ。

父は主に代りて死し、子は主の爲に殞る。父子の忠勇義烈、滿山の櫻花と與に千古に芳し。

(熊田宗次郎—日本史蹟に據る)

五、燕の歌（尾上八郎）

都 大路の あさがすみ、
 たなびき籠めし 青柳の
 千本のみどり くぐりつつ、
 軒端に來たる つばくらめ。」
 「初秋風に さそはれて、
 み空の雲に 消え入りし
 去年の鳥よ」と、 われを見て
 語らふごとき 姿かゝるな。」

をち(遠)

はてしもわかぬ 大海の
 波の五百重の をちに居て、
 もとの主人を 忘れざる
 心をいかに たたへまし。

かをれる
(薰)

花ちり交る やちまたの
 薰れる泥を 含みつつ、
 今年も軒に 巢をかけて、
 はぐくみ立てよ、 汝が雛を。」

六、生存競争

地球上には、動植物各種をして、自由に増殖せしむべき餘地は少しもない。そこに、動植物の各種が、遠慮なしに多數の子を産むのであるから、互の間に劇しい競争の起るのは、見易い道理ではあるが、その有様を詳しく論ずるには、まづ諸生物の生活する有様から考へてかからねばならぬ。

植物なしには、草食動物は生きて居られぬ、他の動物なしには、肉食動物は生きて居られぬ。草食動物を

競—競

飼ふ人は、初より毎日若干の植物を犠牲に供するつもりでなければならず、又、肉食動物を飼ふ人は、初より日日若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。これらのものが相並んで、互に犯さず、共に生活して行くといふことは、到底出来ぬことである。

昔、印度の釋迦が、山中で難行苦行をして居られる處へ、惡魔がためしに來た話がある。まづ鳩に化けて飛んで來て、「お釋迦様、今鷹が私を捕つて食はうと追ひ掛けて來ます。何卒憐れと思つて御助け下さい」といつたので、釋迦は直に鳩を懷に入れて隠してやつた。

釋迦
名は悉達多、
中天竺摩竭陀
國淨飯王の太
子。佛教の祖。

思つて
(思ひて)

所へ、また、悪魔が直に鷹に化けて飛んで来て、「お釋迦様、私は久しく物を食はず、非常に腹が減つてをりま
す。今追ひ掛けて來た鳩を食はなければ、必ず直に餓
死します。何卒憐れと思つて、今の鳩を出して下さい」と
いつた故、釋迦はどうしたら善からうと思案した後、
自分の腿の肉を少し殺ぎ取つて、これを鷹に與へ、遂
に鳩をも鷹をも助けられたといふことである。もと
よりこれは、苟も慈悲忍辱を旨とするものは、この心
掛でなければならぬといふ譬で、教訓としては最も
妙であるが、實際、この方法で、鳩も鷹も助けられるか
たとへ
(譬)

といふに、なかなか、さうは行かぬ。若し、世の中に、鳩も
一羽、鷹も一羽より無く、これを僅に一日だけ助ける
のならば、差支はないが、世には數限のない總べての
鳩と、總べての鷹とを、兩方ともに何時までも助ける
ことは、決して出來ぬ。幸、悪魔が、一回だけより、鳩と鷹
とに化けて來なかつたから宜しいやうなもの、若
し、根氣よく、このためしを何回も繰り返したならば、
腿の肉が一回に半斤づつとしても、十回には五斤と
なつて、今度は釋迦が死んでしまふ。

又、長閑な春の日に、野外に散歩して見ると、草木の

さしつかへ。
(差支)

かいて
(書きて)

讚一讚

青青と茂り、花の美しく咲いてゐる處に、蝶が面白さ
うに飛び廻り、小鳥が楽しさうに歌つてゐる。詩人は
これを詩に作り、畫家はこれを繪にかいて、共にこの
世の楽しさを賞め讚へるが、それは極めて皮相な感
じて、少し丁寧ていねいに考へて見たらば、世の中は決してか
う無事平穩なものではない。鳥がかう歌つてゐられ
るのは、今日までに數千萬の蟲を食ひ殺した結果で、
歌ひながらも、なほ蟲の命を取らうと探してゐる。ま
た、蝶がかう舞つてゐられるのも、幼蟲の頃に澤山の
菜類を食ひ枯した結果である。さうして、彼處の樹の

あそんで
(遊びて)

枝には、蝶を捕へて食はうと、蜘蛛が巧に網を張つて
待つてゐるし、此處の樹の梢には、小鳥を捕へて食は
うと、鷹が鋭い目を見張つて狙つてゐるから、蝶の命
も小鳥の命も、殆ど風前の燈の如く、一つ油斷すれば、
忽ち食ひ殺されてしまふ故、なかなか、氣樂きらくに遊んで
ばかりはゐられぬ。動植物は、總べてかやうに相殺し、
相食ひ合つて、自然界の平均を保つて居るのである。
かかる所へ、年年歳歳、動植物の各種が、夥しく子を
産むのであるから、その多數は、無論、他の動物のため
に餌として食ひ殺され、生き残るものも、餌を得るた

いぢしるし
（著しるし）

兎—兎

めに、甚だしく相争はなければならぬ。動植物の生殖力は、實際無限であるが、それは、代代産まれる子が、悉く生存し繁殖するものと假定した上のもので、現在の如く、いつも、産まれる側から、他の動物にその大部分を食はれてしまふ場合には、もとより著しい増殖の出来る筈がない。なほその上に、一地方における各種の動物の食物の總量には、常に制限があつて、生き残つたものが、皆食ふことは到底出来ぬ。かりに、兎が一疋居るのを、犬が二疋で見付けたとしたならば、先に兎を捕へた犬は飽食し、後れた方は餓死せねばな

あそい
（遅さ）

らぬ譯ゆゑ、如何なる動物も、食ふための競争は免れぬ。又、兎の二疋居る所へ、犬が一疋來れば、速く逃げた兎は生き残り、遅い方は食はれてしまふ譯ゆゑ、大抵の動物は、食はれぬための競争も避けることが出来ぬ。動植物ともに、各自、皆、食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競争して居るのが實際の状態で、これを生存競争といふのである。

（丘淺治郎—進化論講話）

七、 諭言五則

鹿の兒あり、母に隨ひて出でて遊ぶ。騎して弓を手にし、矢を負へる者に遭ふ。母の曰はく、「汝かの肩上有る物を知るか、飛びきて身に中る時は必ず死なん。汝急にこれを避けよ」と。鹿の兒首を掉りて曰はく、「兒はその飛び來る狀の如何を試みん」と。母の去るにも去らず、遂に矢に中りて死にたり。世には頑にして教に従ふことを知らざる、往往かくの如き者あり。

きずつく
(傷)

一小猴、人の髭を剃るを見て、刀を偷み、これに擬して、みづからその鼻を傷つく。世の習はずして事に従ふもの、多くはこのたぐひなり。

蓋一蓋

一貧兒あり、菌を採りて歸り、その母に誇りて曰はく、「阿母の探るところは常に醜し。兒は、その蓋の眞珠の如くにして、その欄の臙脂の如くなるものを獲たり」と。母これを見て歎じて曰はく、「これ毒ありて食ふに堪へざるものなり。兒これを誡めよ。外美なるものは、その中おほく毒を含むものなること、この菌のみにはあらず」と。

いづくんぞ
(安くにぞ)

栗鼠、樹を攀ぢて胡桃を摘み、その皮を噛み破り、顰蹙して曰はく、「何ぞこの苦きや」と。既にして核に及ぶ、乃ち笑ひて曰はく、「まづ苦きを喫せずば、安んぞこの

滋味を得ることあらんと。

一農夫あり、兒を携へ、出でて稻の熟せりや否やを
檢す。兒問ひて曰はく、「この稻の穂を見るに、或は昂く、
或は俯す。いづれか貴き」と。父、二つながらその穂を拔
きて、これを諭して曰はく、「内充實すれば必ず下る。か
の昂然として屈することを知らざるものの如きは、
皆その未熟なるによりてなり」と。(那珂通高)

八、博物館見物に誘ふ文

春もふかくなりて、日あしもやうやう長くおぼ

ついで
(就きて)

え候。折から、かねて御約束の帝室博物館見物の
事おもひ立ち、昨日その掛員の人に問合はせ申
し候ひしに、丁度この頃珍しき品ども陳列せら
れたるよしに候。ついては、明後日は休日にあた
り候へば、朝より出かけ申したく存じ候ふまま、
あなた様の御都合うかがひ上げ候。尤も、隅から
隅まで見るわけにも候はねば、わづかなる時間
にて見終はり申すべく、只半日の御暇候はば、御
供出來候ふ事と存じ候。書の上のみにてはわか
りかね候ふ物も、百聞は一見に若かずと申し

さふらうて
(候ひて)

候ふ如く、かしこにいたり、實物にあたり候うて、
いつも氷解する事に候へば、この度の珍品につ
いても、かならず幾多の發明あることと存じ候。
また、時間のあまりも候はば、盆栽の展覽會も、こ
の程より開かれ居り候ふとか承り候へば、つい
でに見めぐり候はんも、面白かるべく候。もし御
都合かなひ候はば、誠に嬉しく、路順なれば、御宅
へ参り御誘ひ申すべく候。かしこ。

九、茶の湯と生花

煎—奠

凡そ、茶を味ふに三様の法あり。急須・土瓶等に、普通
の茶を煎じ出して用ふるを煎茶といひ、特製したる
茶を、白にて碾きて粉とし、それを茶椀に入るること
少量にして、熱湯を注ぎ、さて、かきまはし泡立たせて
用ふるを薄茶、その碾茶をやや多量に入れ、熱湯を注
ぎ、かきまはして用ふるを濃茶といふ。薄茶・濃茶には
種種の方式あり。これを茶の式と名づく。

茶の湯は東山時代に始まり、其の流派甚だ多し。千
家・有樂・石州等の流派の中にて、最も廣く行はるるは
表・裏の兩千家流なり。昔は清雅なる娛樂の間に、禮式

東山時代
足利義政將軍
の治世。

やはらぐ
(和)

作法の要旨を教へて、武人のあらあらしき心を和げ、かねては奢侈を戒めんための遊なりしが、徳川時代に及びては、一種の表だちたる禮式として用ひらるるに至りたり。今もなほ、中流以上の社會に行はる。生花は、手折りたる花を、瓶又は盆に移し生けて、室内の風情を添へ、床の間の飾となすをいふ。推古天皇の御代に、聖徳太子が、花の枝を水に生くる法を、小野妹子に授けさせたまひしに始まるといふ。妹子はいはゆる池坊流の遠祖なりとぞ。池坊の外に、なほ遠州流などいふ派もあり。

うつは(器)



花を生くる器には、瓶を用ふるを通例とすれど、時としては、竹筒、砂鉢、薄ばたなどいふ器をも用ふる事あり。又、籠製の花活の、竹にて編みたる、藤蔓にて作りたるなど、その種類いろいろあり。

花の種類及び生け方は、いづれも器につれて差別あるべし。又床の間の位置、置物、掛物の種類、庭などによりても、多少の工

夫あるべきなり。

これを要するに、茶の湯の本意は、主客の秩序を正し、坐作進退の禮法を定めて、溫雅靜閑を旨とす。故に、その精神に通ずることを得ば、必ずしもくたくだしき儀式を學ぶに及ばざるべし。

生花もまた同じ理なり。強ひて枝を曲げ、作り撓めて、自然の風情を損ひたるは陋し。なまなかには、ある流儀に泥まんよりは、手折りたるままを投げ入れたるが、風流の本意に適はんことあるを忘るべからず。

(坪内雄藏)

なづむ(泥)

一〇、西洋の家庭

西洋人の客間の様を見ると、壁に掲げた油繪、机の上の花瓶、祖先から傳はつた器具、名譽の記念物はいふに及ばず、知人の寫眞や、遠方からの到來物や、皿鉢までも、處狭きまで陳列してあつて、さながら小博物館の觀を呈して居る。日本の座敷、床の間の飾の、あつさりとしたのに引き換へて、賑はしく派手やかである。窓掛の總の重げに、絨氈の色の鮮なのは、日本の白い障子と、青疊の小ざつぱりしたのとは、全く其の趣

あつて
(在りて)

を異にして居る。

西洋では、客間と、食堂と、寢室とは皆別別で、食堂も相應に奇麗に裝飾してある。客を饗應する時にも、ここに導くのである。

食事の時には、合圖の鈴などを鳴らす處もある。朝食は、獨逸、佛蘭西などでは、大抵麵包と咖啡とで濟ます。が、英國では冷たい肉、いぶした魚なども食ふ。晝食を重なる食事とする國もあり、夕食を第一の食事とする國もあるが、英國などでは、夕食の卓に著く時は、同じ家内のものでも、顔を洗ひ、髪を梳り、衣服を改める。

佛一仏

くつろいで
(寛ぎて)

食事中は打ち寛いで談話するが、少しも禮儀を亂すやうなことは無い。知人を招待する時も、家内一同と食事を共にする習はして、日本のやうに、主人だけが客と膳に向ふのでは無い。招かれる人も、其の家族一同と睦び合ふのを樂として來る。食事後の談話時間は最も楽しい時間で、其の間、主婦や娘がピアノを弾ずれば、他の者は歌を歌ひ、又様様の室内遊戯をする。食卓の周旋は主婦たる人の役目で、肉を切つて盛り分けて、一同に分ちなどする。料理も、中流の社會では、大抵主婦が自ら拵へるので、しかも、一片の肉を色

戲一戲

色に使ひ、屑が出れば、其の屑で又別な料理を拵へるといふ風に、少しも物をむだに使はぬ。家の經濟を能く立てて行くことが、主婦の主要な任務であることは、東洋も西洋も、古今ともに變りはない。

日用の食品等を整へる場合にも、必ず籠を手にし、市場に買ひに行くので、家に坐して魚屋八百屋の出入を待つて居ることはない。外出にも不斷著のままで出掛けることが多い。すべて衣服の類も、割合に質素を旨とし、身分不相應の贅澤をすることは少ないやうである。音樂を聽きながら、子供の守をしなが

やほや
(八百屋)

あんど
(編みて)

ら、又は汽車電車の中などでも、婦人が斷えず編針を動かして、毛絲を編んで居るのは、外國に遊んでみると、直に目につくことである。男が、ぼたんの落ちた服を著て居れば、妻がいくぢなしのやうに云はれるのは、丁度我が國で、綻の切れた著物を子供に著せて置くと、母が笑はれるのと同様である。

障子の破れを繕ふ世話もなし、シャツや襟などのよごれ物は、洗濯屋へやるから、主婦の仕事は日本より少ないやうに思はれるが、窓硝子の拭き清めや、絨氈の塵拂や、部屋部屋の整頓・掃除など、日常の仕事に

も、なかなか骨の折れることが多い。併し、食事の時間に、不意の來客もなく、客の來る毎に、一一茶や菓子を出すと、いふ習はしは無いから、其の點は樂である。

(高等小學讀本による)

一一、眞の接待ぶり

むかし、さる都に、ある夫人の客扱に巧なるが住みけり。ある時、田舎より、その友どちの遙遙と訪ひ來りけるを、喜び迎へて、強ひて數日の逗留を勧め、山海の珍味を饗したるは更なり。夜の衾、朝の著替に至るま

珍一珠

で、得らるべき限の華美を盡してもてなしたり。かくもてなしつつ、主婦は、われながら心づかひの至らぬくまなきを感じければ、いと誇らしげに見えけるを、客なる夫人は、さまで喜べる色もなく、やがて暇を告げんとする時、數數の御心づかひは、身に染みて嬉しく受けまゐらせぬ。わが住める方は、片田舎に侍れど、年久しう都にのみ住み馴れ給ひし御身には、又見るめ新しきふしもおはせん。折もあらば音づれたまへ。わらははまた、君がなし給ひしよりも、更によき接待ぶりを心得侍るぞよと、うち笑ひつついふ。心なの

いひ草やと思ひて、主婦はいと不興げにうなづきて、
やがて別れぬ。

はかなく明け暮れて、三年にもなりぬ。都の夫人は、
たまたま旅に出で立ちしが、路の序に、彼の友どちの
ことと思ひ出でて訪ひけり。そなる夫人は、喜びて出
で迎へ、別れて後の事ども、かたみに心ゆくばかり語
りあひつつ、今宵はここに」と、せちに留められて宿り
ぬ。やがて、ゆふけの膳に向ふ時とはなりぬ。と見れば、
一家の常食なるべし。あやしきつまみ料理の、そのま
まなるを饗したり。都の夫人は、こなる主婦が、さき

ついで(序)

真一真

の廣言のこと胸に浮びて、不思議なる面持するを、主
婦は、さもこそとうち見やりつつ、さて詞を改めて、君
には、よも、わが先の廣言をば忘れ給はじ。わらははか
の折、眞の接待ぶりを知れり」といひき。これぞ眞の接
待ぶりなる。君よ、わが無禮なることばを許させ給へ。
さても、君のわらはをもてなし給ひし折の御心づか
ひは、如何ばかりなりしぞ。君はまことに數數の用意
を凝らし給ひき。されど、わらはは君の親しき友とし
てにはあらで、見ず知らずの他人扱を受けしが如く
感じたり。わらはは、今、君を迎へて何ばかりの用意を

あつかひ。
(扱)

もなし侍らず。そは、わが心には、君を眞の友と思ひ、は
 ては、わが家族のうるはしき一人と思ひまゐらすれ
 ばなり。わらはは、固く信じ侍りぬ。まことの友を迎ふ
 る道は、隔なき心の接待にありて、さまさまの用意に
 はあらぬことを。そも、君にはいかが思ひ給ふらんと、
 なつかしき眼に、客なる夫人をうち見やりつついひ
 ぬ。客なる夫人は、詞はなくて、うなづく領うなづくづきぬ。いたくも感に
 打たれたりけん、そが眼には、ゆかしき涙の珠をさへ
 やどせり。(萩舎漫録)

一二、心の寶

人の寶は廉潔に勝れるはなし。支那春秋の時、宋の
 國に司城子罕といふ人ありき。ある人より美しき玉
 を贈られたるを受けざりければ、かの人、「これは、玉人
 に見せしに、よき玉なりといひしが、故に贈るなり」と
 いふ。子罕答へて、「吾は貪らざるを以て寶とし、汝は玉
 を以て寶とす。汝今汝の寶を以て吾に贈り、吾亦わが
 寶を捨てて汝の玉を受くる時は、かれこれ互に寶を
 失ふことなれば、然せんよりは、與へず取らずして、各
 その寶を有する方まさるべし」といひきとぞ。子罕の

玉を受けざりしは、その最もすぐれたる寶を失はざらんが爲なりしなり。

また、後漢の代に楊震といふ人ありき。東萊郡の大守となりて、任所に赴きけり。途に昌邑といふ縣あり。その令は王密とて、さきに震に擧げられたる人なり。されば、夜に入りて、金十斤を懷にし、震の旅宿に往きて、これを贈らんとせり。震辭して、「吾は君を知れるに、君の吾を知らざるはいかにぞ」といひければ、「これを受け給ふとも、夜中なれば、他に知る人なかるべし」とて、また勧めたり。震また答へて、「夜中なれども、天も知

辭一辭

いなむ(否)

るべく、神も知るべく、吾も知り、君も知れり。然るを、何によりてか、知る者なしとはいふぞ」とて、否みて受けざりき。面前に見る人なしとも、明暗を以て行を二つにすべからざるなり。(那珂通高)

一三、藤樹先生 その一

中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生まれき。學、王陽明の流を汲みて、その徳行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。

中江藤樹
儒者。名は原。
世に近江聖人
と稱す。
小川村
高島郡。今青
柳村に屬す。
王陽明
明の大儒、名
は守仁。良知
の説を立て
て、一世の師
表たり。

歿一没

先生の歿後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふと先生の墓所小川村に在りと聞き、その村に尋ね行きて、路傍の農夫に向ひ、「先生の墓所は」と問へるに、農夫は、「畑道なれば知れ申すまじ。案内致し參らせん」とて、士人を導きて行きけり。程なく小さき茅屋の前に出でけるが、「しばし待ち給へ」とて、農夫は内に入り、やがて出で来るを見れば、木綿の新しき著物の上に、紋つきたる羽織を著たり。士人は驚きて、さても丁寧なる男かなと思ひて、附きてゆくほどに、やがて墓所に至りぬ。農夫は竹垣の戸を開き、「いざ入りて拜し給へ」

かうむる
(蒙)



中江藤樹肖像

といひて、その身は戶外に退きて恭しく拜伏せり。士人はこの様を見て再び驚き、さては、衣服を更めしは、われに對するのためにはあらで、先生を敬するためにてありけるよと思ひつきければ、農夫に向ひて、「汝は藤樹先生の家來筋のものなるか」と問ひぬ。農夫は詞を改めて、「さには候はず。されど、この村のものは、一人として先生の御恩を蒙らざるものなし。我等が親を敬ひ、子を慈しむことを辨へ知りたる

は、皆これ先生の御恩なれば、子子孫孫、必ずその御恩を忘るべからず」と、わが父母常に教へ候ひき」と答へたり。士人は、そのはじめ、ただ何となく一見せんとの心にて來りしが、この農夫の舉動によりて、俄に敬慕の念を起し、懇にその墓前に禮拜して歸りきとぞ。

この一事、以て、先生の徳行のいかに高くして、また、その化育のいかによく下におよびしかを見るに足らん。

一四、藤樹先生 その二

熊澤蕃山

儒者。名は伯繼、字は了介、蕃山はその號。京都の人。

熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に従ひし始を尋ぬるに、面白き話あり。

えのき
(榎木)

その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より、馬を雇ひて榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと、鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取りあげて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、いそぎ榎木に走り行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無かりければ、その金を取り出して返しけり。飛脚は、死したる者のよみがへりたるここちして、行李

おほいに
(大きに)

とさむ(納)

より別の金子十五兩を取り出して、馬方に與へ、もしこの二百兩なくば、わが一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に行はれん。されば、この恩をか言葉にいひ盡すべきにあらず。まづ當座の御禮までに、これを贈り奉る」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける顔色にて、「そなたの金をそなたに取り納め給ふに、何の禮いふことかあるべき」とて、手にだに取らず。色色にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故、やむことを得ず、十兩となし、五兩となし、三兩となし、段段減じて、つひには金二歩となし、せめて、

致良知

江藤樹筆蹟

こればかりは」と、理を盡し、詞を盡していふに、「この金を受くるほどならば、二百兩をも留め置くべし。それだにかく返し申すからには、聊にても謝禮を受くるはわが心にあらねど、あまりに餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは、今夜休むべき所を、ここまで追ひかけ來れる賃錢なり。わが取るべき錢なれば申し請くべし」といひて、二百文を懐にし歸らんとす。飛脚は感に堪へかねて、その氏素性を尋ね問ふに、

うぢ(氏)

「名ある者にあらず。又何一つ知れる者にあらず。只、わが在所の近くに、小川村といふ所あり。そこに與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことをす。某も折節行きて聞き申したるに、『親には孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず』などいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、わが物にあらざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり」といひ捨てて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さ

ても、この度は辛き命活きのびて、各方にも對面することを得たり」とて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山、をりふし田舎よりのぼり居て、學問修業最中なりしが、この物語を聞きて、その人こそ眞の儒といふものなれとて、翌日すぐに江州に至りて、小川村に藤樹先生を尋ねて、隨從を願へるに、人に教へ申すほどの學徳なし」とて、さらに許し給はず。蕃山、ひたすらに願ひて、二日が間先生の門にただずみて歸らず。先生の老母、これを氣の毒がり、よしやまづ内に入れ申せよ」とあるに、いなみがたくて内に入れ、つひに師弟

備前侯
岡山の城主池
田光政。

の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病
身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり。御役
にも立つべきものなり」とて、蕃山を出されけり。いづ
れも格別のことなり。(橋春暉東遊記)

一五、格言

一、嘉肴アリト雖モ、食ハザレバ其ノ旨キヲ知ラ
ズ。至道アリト雖モ、學バザレバ其ノ善キヲ知
ラズ。(禮記)

臺
臺

一、木ノ長カラシコトヲ求ムルモノハ、必ズ其ノ
根本ヲ固クシ、流ノ遠カラシコトヲ欲スルモ
ノハ、必ズ其ノ源ヲ深クス。(舊唐書)

一、合抱ノ木モ毫末ヨリ生ジ、九層ノ臺モ累土ヨ
リ起リ、千里ノ行モ足下ヨリ始マル。(老子)

一、太山ハ土壤ヲ讓ラズ、故ニ能ク其ノ大ヲ成シ、
河海ハ細流ヲ擇バズ、故ニ能ク其ノ深ヲ就ス。

(史記)

一六、安宅

時しも頃は春のはじめ、風まだ寒き北國路を、いたはしや義經は、兄頼朝の嫌疑をうけ、奥州として落ちて行く。主従僅に十二人、辨慶を先達せんに、山伏姿に身を窶し、日數程經て加賀の國安宅の港に著きにけり。

義よいかに辨慶、旅人等の尊たうによれば、安宅には特に關を設けて、山伏をきびしく取り調ぶる由、如何にすべきぞ。」

辨よこれはゆゆしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。」

人人「いやいや、何程の事かあらん、ただ打ち破つて

安宅
加賀國能美郡。
但し當時の關
の趾は、今海
中に陥りたり
といふ。

御通りあるべし。」

辨よいやいや、打ち破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべく穩便に通とりたくこそ候へ。」
義よ然らば辨慶、ともかくもよきやうに計らひくれよ。」

辨よ畏つて候。先づ考へ出したることは、我等かく山伏に身をやつせども、包みがたきは我が君の御姿なり。畏れながら、暫く強力がうりきに御身をやつされ、御笠深く召され、我等の笈あしを負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。さなくば忽に見あら

おひ(笈)

はされ候はん。」

善よげにげに、これはさる事なり。」

姿をやつし主従は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば、關の役人富樫左衛門、

富とみやあやあ、山伏達、關なるぞ。名をなのれ。」

とぞ呼ばはりける。

辨わ承つて候。これは奈良東大寺建立の爲に、北陸道を勸進する山伏にて候。」

富とみそれは殊勝の事なれども、山伏なるからはこの關は通しがたし。」

辨わして、そのいはれは。」

富とみさればなり。頼朝義經御不和により、義經殿には、山伏と姿をかへて、奥州へ落ちらるる由、かるが故に諸國に新關を設けて、山伏をかたく止むるなり。一人も通しがたし。」

辨わ承つて候。しかし賈山伏をこそ止めらるるならめ、まことの山伏を止めたまふことは候はし。」

富とみあらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立の勸進ならば、定めて勸進帳をばもちたるべし。ここにてそれを讀みあげられよ。某これにて

まうく
(設)

聽聞せん。」

辨「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中よりあり合はせの卷物一つ取り出し、勸進帳と名づけつつ、即智を以て文を綴り、まことしやかに聲高く、天にも響けと讀み上げけり。富樫つくづく聞きすまし、

富「最早疑は晴れて候。御通り候へ。」

辨「かたじけなく候。」

げにや、紅は園生に植ゑてもまぎれなし。後に従ふ強力を、富樫目早く見とがめて、

そのふ。
(園生)

富「いや、暫く。その強力は通し難し。とどまれ。」

とののしりぬ。すは、我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちどまる。

辨慶騒がずそらとぼけ、

辨「いや、強力め、何とて早く通らぬぞ。」

富「いや、それはこなたより止めたるなり。」

辨「そは又何故。」

富「あの強力が姿、義經殿に似たるゆゑなり。」

辨「奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しかいはるる強力めは、一生の名譽ならんが、ざりとは腹立た

さかひ(境)

しや。けふのうちに能登境まで行かんと思へばこそ、強力やとひたるに、僅の笈を重げに負ひて、人人に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し。いで、こらしてくれん。」

金剛杖をおつ取つて、さんざんに打擲す。

これはと驚く人人を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打ち据うれば、富樫やうやく疑念をとき、

富「これはわれ等が誤なり。その強力には構ひなし。とくとく一同御通りあれ。」

いふに人人ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばさ

らばと立ちあがり、關路をあとにしづしづと、奥州さして下りけり。(坪内雄藏—國語讀本)

一七、 征衣上途

動員令のあつたその日から殆ど一箇月目、即ち明治三十七年五月二十一日、これぞ生涯忘れることの出来ない嬉しい日であつた。

愈、戦地へ行かれることになつて見ると、半時も早く出發したいと、誰一人思はない者はなかつた。さて、その待ちに待つた出發の日は決定して、午前六時城

内練兵場に整列せよとの命令が下つた。

日頃の熱望ここに達して、男兒の本懐これに過ぎるものはない。我等の歡喜は無限であつたが、この歡喜と共に、又暗涙の浮ぶのを禁じ得なかつた。丈夫涙無きに非ず、離別の間にそそがずとか。無論、今更戀戀として家を顧み、親を慕ふのではないが、生きて再び還らぬ決心があればある程、これが親子、兄弟、今生の見納かと、流石に悲愁の思に閉されて、よしや紅涙襟を濕すには至らずとも、眼底には一滴の露なきを得ないのが、人情の常であらう。

戀
恋

出發の前夜は、舊友の寫眞を出して見たり、机の中を片付けたり、死んだ後で、留守の者に何一つ分らぬことのないやうに、それぞれ整頓してから、疊の上での最後の眠を求めようと、寢床に就いた。

暫しまどろむと思ふ間もなく、柱時計は午前三時を報じた。すはと跳ね起き、冷水で身を清め、晴の征衣を著飾つて、宣戰の大詔を奉讀し、遙に大君います東の空を伏し拜み、次にこれを最後と、祖先の靈前に禮拜したが、この時は、汝は汝にして汝にあらず。陛下の御爲進んで難に赴け。未練なるふるまひして家名を

いほつて
(祝ひて)

汚すな」と誠められるやうな感じがした。さて家族一同、自分を圍んで別杯を舉げて、皆このめでたい出陣を祝つてくれた。

「後の事は少しも心配するに及ばぬ。思ふ存分に働け。あつばれな功名をして、家門の花を咲かせてくれ。」
「私の事は決して御心配遊ばすな。武士の譽としてこんな嬉しい事は御座いませぬ。折角御體を御大切に遊ばせ」とは、ただに自分の家のみでなく、今日出征する人の殆ど總べての家家で、親子の繰り返した悲壯な語であつたであらう。時は迫つた。自分は神前に供

へておいた軍刀を腰に著け、勇みに勇んで我が家の門を後にした。

午前六時、聯隊は整列を終へ、軍旗は莊重な「足曳」の曲の吹奏に迎へられて、朝風に翻つて居る。聯隊長は沈痛な音調を以て、故國を去るに臨みての最後の訓示を朗讀せられた。終はると又聯隊長の發聲で、一同、大元帥陛下の萬歳を三唱した。

「第一大隊より前進」。これ進軍に臨んで聯隊長が部下に下された最初の號令であつた。我等は既に征露の途に上つたのである。一同、血湧き肉躍るの思があ

征露
明治三十七八
年戦役。

つた。向ふ處は天柱も抜くべし、地軸も碎くべし。

長蛇の如き我が聯隊は、熱心誠意よりほとばしり出でたる國民の萬歳の聲に送られて、勇ましく前進した。次第に遠ざかる靴の音、蹄の響は、いかばかり國民の耳に頼もしく聞えたことであらう。遠く近く吹き渡る喇叭の音は、即ち親愛なる同胞に對する暇乞であつた。老も若きも手に手に國旗をふりかざし、齊しく唱へる萬歳の聲、天地をとどろかすを見聞しては、我等は誓つてこの至誠に報いなければならぬとの感慨を深くした。その後度度の戦闘に、喊聲を揚げ

て敵壘に突撃する毎に、背後で國民の萬歳の聲が潮の如くに湧き起るやうに感じた。我等の喊聲は國民の萬歳の聲の反響に外ならぬのである。巨彈耳をかすめる戦場の朝にも、嚴寒骨を刺す露營の夕にも、決して忘れることの出来なかつたのは、國民が熱血を絞つて叫んだ萬歳の聲であつた。(櫻井忠温―肉彈に據る)

一八、北白川宮能久親王殿下その一

明治二十七八年戦役終はりて、臺灣の地我が有に歸したりしが、兇賊その地に據り、險を恃みて、敢へて

王師に抗せんとす。北白川宮能久親王殿下、近衛師團長として、兵を率ゐてこれを討伐し給ふ。

五月三十日、臺灣の北海岸なる洩底に御上陸あり。此のあたりは人里遠き磯邊にて、立ち休らひ給ふべき軒端もなく、やうやう沙の上に幕を張り、毛布一枚とてもあらざれば、怪しげなる椅子一脚を參らせて御座所とす。をりふし樺山大將參られ、この有様を見て、「あなかしこ、ここは皇族の御方の、始めて御足を新領土に印し給ひし處なれば、後の世までも傳へまし」とて、木を削りて、筆太に「近衛師團長陸軍中將能久親

樺山大將

名は資紀、鹿兒島藩士。海軍大將、功を以て華族に列し、伯爵を授けらる。

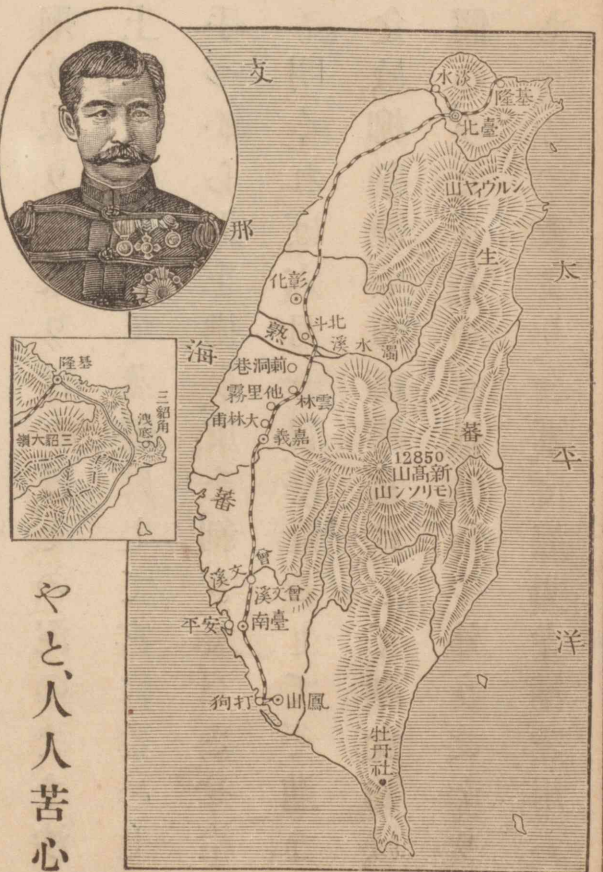
幕一幟

王殿下幕營の地」と記してぞ建てられける。

この夜雨降り、蚊さへ多くして、人人いも寝られず。食物も不自由なりけるが、誰とも知れず、畑の甘藷を掘り取りて來りければ、その泥のまま沙に埋め、その上に火を焚きて、蒸焼にして宮に差めしに、宮には、御手づから泥を拂ひ、皮を剥ぎて召させ給ふ。

明くれば六月一日、基隆さしてぞ進ませ給ふ。御晝食は柳割籠なる御辨當にして、副食物はただ梅干二個のみなりしが、「今日は殊の外うまかりき」と御沙汰あり。この夜より、全軍、皆道明寺糒を用ふ。道險にして

ほしひ(糒)



せん方なかりき。翌日は三貂大嶺の險を越えて、舍營につき給ひしに、夜の九時に及べども、未だ夕食をまゐらするを得ず。やうやう、従者恩地某が、不慮の用に

糧食運搬の便なればなり。いかにもして宮には常の食をまゐらせば

やと、人人苦心しけれども、

もとて、袋に入れて負ひ來りし乾果と懷中肉汁とにて、飢を凌がせられ、明日は必ず基隆を攻め落して、三鞭の盃をこそ舉げめ」とうち戯れ給ひ、あやしげなる寢臺に、鼾聲雷の如く御熟眠あらせられたり。

一九、北白川宮能久親王殿下その二

この三貂大嶺といふ山は、上り二里、下り三里半もやあらん、音に聞えし峻阪にして、御馬に召さるべくもあらず。あまりの御痛はしさに、轎を進めしに、轎夫の辛勞を御覽じて、畏くも棄てて召されず、險路を物

ともし給はで、勇ましげに歩ませ給ふ。士卒これを見て、足の疲をもち忘れつつ、敵前に進みけり。この日、朝のほどは日照りて熱かりければ、傘を進らせしに、宮は「戦の場にありて、照降傘は要なし」とて用ひ給はず。されども、あまりに熱かりければ、薄を切りて日蔽となし給ふ。

おほひ(蔽)

山を下り給ふ頃より雨降り出でしかば、傘を進らせしに、宮は「士卒皆雨にうたれて戦ふに、われのみいかで傘を用ひん」とて、暴雨に沐し、御軍服もしとどに濡れそぼち給ふ。やがて、敵前近くなりぬれば、目立ち

もやせんとして、勳章を脱し、草鞋姿かひがひしく、御脛のあたりまで泥に塗れ、青竹を杖つきてぞ進ませ給ふ。貴き皇族の御身もて、士卒と櫛風沐雨の艱難を共にし給ふ有様いと畏しとも畏し。阪井聯隊長の、御前にまゐりて、ただ「殿下」と一言申して、後に續かん言葉なく、涙にくれて、御顔をだにえ拜み奉らざりけるこそことわりなれ。

三貂嶺の山路にて、はや戦の始まりし頃、左手の方よりうち出す賊の銃丸は雨の如く、幾度か宮の御頭の上を掠めけり。我が兵これを撃ち退けて、宮は遂に

くづす(崩)

峠近く上り給ふ。折しもあれや、左手の山の頂に構へし壘壁より、雨霰と射出ししを、しや、小癩なり。ただ一揉に揉み崩さん」と勇み立つたる猛夫ども、鬨を作りて、無二無三に突貫し、瞬く間に攻め散らしぬ。峠に登りて前面を見れば、水田渺茫として、川は其の間を流れ、見る目遙けき山際には、人煙繁華の巷あり。忽ち砲聲殷殷として彼方に聞ゆ。かねて定めし時刻なれば、これぞ基隆の敵壘と、我が艦隊との激戦中とは知られけり。

已にして山を下り給ひしに、賊兵と覺しくて、一百

ばかり、此方をさして逃げ來るを、我が兵邀へてこれを撃つ。銃丸は宮の御頭の上を過ぎたれども、彈道高くして、何の御怪我もなかりけり。

かくて、基隆も陥りければ、宮は市街の北端なる賊の本營に入らせられんとし、敗兵の狙撃もやと、まづ門内を窺はせられしに、果して銃丸ぞ飛び來にける。さてこそと、あたりを搜索せしに、天井又は床の下、此處の隅彼處の陰に、二人或は三人、都合十四人の賊兵あり。抵抗せし者どもは、皆引き捕へて斬り殺しつ。かく宮の御大勇は申すまでもなく、貴き御身を以

て、寛宏の量に富み、忍耐の徳すぐれさせ給へること、誠（西村時彦―北白川の月影）に武將の鑑とこそ申すべけれ。

二〇、家の紋

余は曾て羽織袴で西洋人の饗應に招かれた時、主人から紋の由來を質されたことがある。又、先頃日本へ來た支那の提學使から、或處の宴會で、同じく紋の起源に就いて質問を受けたことがある。日本服の三つ紋、五つ紋は、外國人の目からは餘程不思議に見えるのであらう。

家の紋の起は古い事では無い。大凡鎌倉時代以後位の事であらうといふ先哲の説がある。元は旗幕などに附けたのであるが、後には段段、素袍、直垂、小袖などにも附ける様になり、自らその家の徽號となり、後には冠婚葬祭の禮式の時には、必ず家の紋の附いた著物を著る事になつた。今では大禮服を始として、通常禮服としては燕尾服を用ひ、通常服としてフロッツクコートを用ひる等、すべて洋服を禮装と定められたから、公の禮服には日本服を著る場合はないが、通常各自の交際では、家の紋のある羽織、又は小袖は、自

蹟—迹

ら禮服の様になつて居る。
家の紋の發達は武家以來の事であつて、武士道とともに益發達したに違ない。武家時代には其の家の系圖を重んずる風が盛んであつたから、其の家の紋によつて、先祖の事蹟を忘れず、先祖傳來の家の名を墜すまいといふ考があつたのである。それ故、昔は家の紋を改めることは、中中やかましい事であつて、濫りに改めてはならぬ事になつて居つた。身上のくづし始や、紋所といふ川柳もあるほどである。

四民平等の今の世の中となつては、昔の武士ばかり

第—第

りではなく、誰でも家の紋をつける様になり、新しく紋所を工夫したのも多からうと思ふ。今の世の中は家祿の制もなく、當人の器量次第で、どんな立身も出来るとはいへ、我が日本の社會では、家が根本になつて居る事を思へば、また舊來の家の紋を貴ぶ心を忘れてはならぬ。家の紋を貴ぶといふことは、つまりは其の祖先を忘れぬといふことである。(芳賀矢一)

二一、美しき自然(武島又次郎)

空にさへづる 鳥のこゑ、

涼—涼

峯より落つる 瀧のおと、
 大波 小波 どりどりと、
 響絶えせぬ 海のおと。
 聞けや、人人 おもしろき
 この天然の 音楽を。
 春は 櫻の あやごろも、
 秋は紅葉の からにしき、
 夏は涼しき 月の 絹、
 冬は眞白き 雪の 布。
 見よや、人人 美しき

この天然の 織物を。
 薄墨ひける 四方の山、
 紅にほふ 横がすみ、
 海邊 遙に りちつづく
 青松白沙の 美しき。
 見よや、人人 たぐひなき
 この天然の うつしゑを。
 あしたに起る 雲の 殿、
 ゆふべに懸る 虹の 橋、
 晴れたる空を 見渡せば、

青天井に 似たるかな。
 あふげ、人人 珍しき
 この天然の 建築を。

二二、龍華寺の眺望

龍華寺は久能山を去ること一里有餘、不二見村字村松といふところにあり。近き頃、ある僧の、この處の風光を喜びて、かりそめに庵を結びしより、その名頃に世に聞ゆるに至りきとぞ。馬琴が玄同放言に、大約士峰の眺望は、駿河國有渡郡龍華寺の庭より觀るを

久能山
駿河國有渡郡
 久能村。

馬琴
瀧澤解、馬琴
 はその號、有
 名なる小説
 家。
 玄同放言
書名、馬琴の
 隨筆。

挿挿

かぢ(楫)

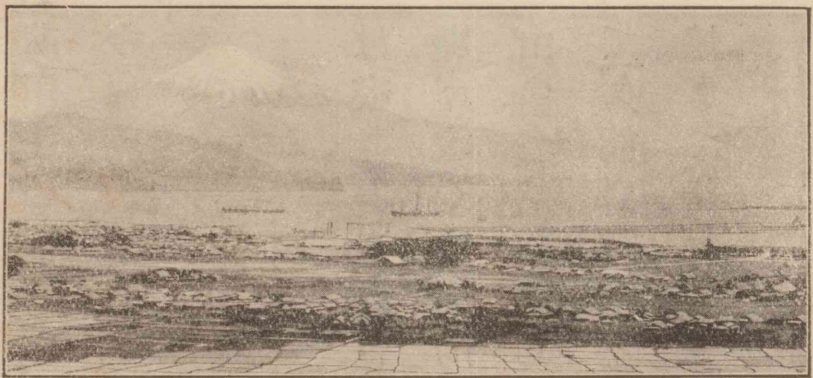
第一とすべし」とあるも、やがてここを指せるなり。

そも、龍華寺の地たるや、程近き清水灣を隔てて、玲瓏たる芙蓉峰の八葉、高く天に挿めるを認め、愛鷹箱根・二子・天城の群嶺は、その右麓に侍衛して、興津・袖師・浦田子の浦・千本松原など、さながら目睫の間に在り。みぎには三保の松原、波の間に綠を浮べて、左には清見瀉の古關、見る人の心をとどむ。江の面には、大君のみつぎを運ぶ蟹船、楫もほさず、あるは姿横たふる富士の嶺の雲に棹さし、あるは底に沈める三保の浦松の綠を分けつつ、漁歌互に答ふるさま、いと心あり

ふじ(富士)



世に富士の嶺を望むところ多かれど、あるものはあまりに遠くして、有るか無きかの姿おぼおぼしく、あるものは間近きに過ぎ、却て雲霧のなげき絶えざるを、此處は中らの程を得たり。これ、龍華寺の眺の、天下に冠たる所以の一なるべし。



龍華寺より見たる富士山

また、世の名所、水によしあるは山の方おくれ、山の眺すぐれたるは水の心ばへ劣れるが習なるを、ここは海山二つの景色を具へて、上下ことごとく畫圖なり。これ、龍華寺の眺の、天下に冠たる所以の二なるべし。

また、世の勝地は、大概、一つの名所に限りて、二つ三つを兼ねたるは少なきを、此處は清見、三保の

崎田子の浦など、天下有數の名區を聚めて、唯雙眸の中に收むべし。これ、龍華寺の眺の、天下に冠たる所以の三なるべし。

されば、四方の景物悉く詩材を供して、二つなき眺は盡きねど、暮色蒼然として至るに及び、顧みがちに別れゆくに、夕陽山の端に殘照を留めて、又、類なき江山の名殘を惜しむに似たり。加茂・蛇塚などの村を経て、久能に歸りし頃は、海の音のみ暮れ残り、漁火浪を燒きて、新月まさに海角を離れたり。(武島又次郎—霓裳微吟)

二三、富士山の頂上

一、旭日の影

東雲の空ほのぼのと明けゆくままに、うちながめ居れば、箱根・足柄の裾をまとひ、寶永の頂にかかれる白雲は、かき消すやりに失せて、やがて、中空に紫雲たなびき、海面に漂へる一帯の層雲は、黄金色を帯び御光燦然として蒼天を貫くかと思ふ間に、やをら旭日團團として天に朝する光景は、さながら天の岩戸の古事も思ひ出でられて、眼眩み、心機天外に馳せて、こよなうらるはしく尊く覺ゆ。

やをら

二、風伯の怒

頂は風吹かぬ日としてはなし。剩へ、その力なみならず強ければ、山の懷を掠めて吹きあぐる音、宛も遠雷の如く、觀測所の附近に犬牙錯雜せる巖を衝いて碎け散る聲は、いといと物凄く、その餘勢噴火口を襲ひて、坑底に吹きおろす響は、瀑布の懸崖より落つるが如く、怒濤の岸を撼かすに似たり。かかる折ふし、丑三つ時の戶外の觀測の怖しさ、いふばかりなし。

つよ
(衝きて)

三、下弦の月

風伯の怒れる折の怖しさもさることながら、風な

悪一悪

き夜半の山頂こそ、物すごき限なれ。突兀たるあたりの巖は、悪鬼のわれを襲ひ來るか、と怪しまれ、黑暗暗たる大噴火口は、今しもわれを呑まんとて待つもの如し。かかる折から、下弦の月、銅色を放つて巖頭にかかれる光景は、實に、地獄のさまもかくやとばかりにて、身はさながら劔の山とやらんにさまよひぬる心地して、すさまじとも凄じ。

四、山のあるじ

十月十三日、東京にまします父母の御許に、恙なり頂上に著きにしよしを認めて、吾を送り給へる義弟

とどこほり
(滯)

清殿にことづて参らせしに、清殿も、いつ果つべき名
残ならねばとて、何くれと御心を盡し、さらば、滯なり
事を遂げさせ給へ。いざとて、立ち出で給ふ。やがて、姿
は巖の陰に隠れて見えなくなりぬ。それよりは、さしも
廣き富士の頂に、良人とわれと二人の外には、禽獸す
らあらずなりぬるにつけて、二人こそ、今より富士の
あるじなれと、互に思ひ慰めてしことの心に沁みて、
今も富士を見るたびに、わが物の心地ぞせらるる。

五、下界の音信

名に高き千島の國の報效義會員兩名、神無月二十

郡司大人
名は成忠、豫
備海軍大尉。

いたう
(痛く)

あつ
(膝行)

八日といふに、郡司大人の仰をうけたまはり、御文と
數數の贈物とを剛力に負はせ、氷雪を冒して訪ひ給
ふ。正午の頃にやありけん、外面にこつこつと戸を敲
く音す。また例の風にやはからるとて、うちすまし
てありけるに、やがて、あやしげなる聲して、見舞の者
こそ参りたれ。此處開け給はずや。寒氣に堪ふべくも
あらずといふに、いたう驚かれて、馳せ出でたれども、
門口は氷に閉されて、戸のあくべきやうもなし。せん
方なく、内外力を合はせて、窓の戸引き放ち、口狭けれ
ば、しりへよりあざり給へ。氷に傷づかせ給ふな。徐に

とぢらる
(閉)

せさせ給へ。見たまふ如く、今ははや七日あまり、氷雪にとぢられ、外面に出づることえならぬば、年内は、もはや下界の音信を得んこと思ひもよらずなど、うち語らひつる折から、眞に思ひもかけず訪はせたまへる事、こよなきよるこびにこそ候へ。嶮しき山路に、こそ勞れたまひつらめ。狭くとも、今宵は此處に」と、この夜は、よもすがら文幾通となく認めて、故郷の方方に贈らんとす。實に思はざる外の便を得つることの嬉しさ、いひ出づべき言の葉もなし。方方は、明くる日の正午頃には、はや此處を立ち出でたまふと聞きて、

郡司大人に文かきて參らする端に、

吾が爲にはるばる訪はせ給ひつる

心おもへば、なみだのみして。

方方の姿を見送りて、良人も、

わが國の北のしづめとなりぬべき

ますらたけをの身を守れ、神。

(野中千代子)

しづめ(鎮)

二四、富士の嶺

賀茂眞淵

富一富

富士の嶺の麓を出でて行く雲は、

足がら山のみねにかかれり。

村田春海

心あてに見ししら雲はふもとにて、

思はぬ空にはるる富士の嶺。

加藤枝直

天の原照る日にちかき不二の嶺に、

いまも神代の雪はのこれり。

二五、銷夏日記

今年もなかばは
慈鎮の今様に、秋の初に
なりぬれば今年も半ばは過
ぎにけりわがよふけゆく月
影の傾く見るこそ悲しけれ。
かへで(楓)

七月一日、「今年もなかばは過ぎにけり」ととなり
の女兒うたふ。

三日、半夏生、却て雨なり。籬の楓の枯れしあとに、
女竹五竿植う。

今植ゑた竹からも来る嵐かな。

とは古人の句。雨灑ぎて婆娑婆娑、木には見られぬ趣
深し。

八日、三日月清し。今夕はじめて近きあたりの大
榎に蜩の聲を聞く。

十三日、隣家の翁、杉籬ごしに、泰山木の花咲きた

逗子
相模國三浦郡
原宿
東京府下豊多摩郡

ラファエロ
伊太利の畫伯。西曆一五二〇年歿す。

れば、見に来よ」といふ。行きて見る。葉はゆづり葉のそ
れに似、花は白木蓮を三つ四つも合はせたる程にて、
芳香譬へん方なし。富麗にしてしかも品高き花なり。
十六日、去年近處の林より移し植ゑし山百合は
じめて開く。逗子あたりは、六月の中旬を盛りとする
に、一月も後れたる、一は今年の氣候の故もあるべし。
盡日、細雨煙の如く、原宿の夏いと寂し。友人某より寄
贈せられたる「畫聖ラファエロ」を讀む。眞面目の著作、
ラファエロ及びその時代の一斑を窺ふに、倔强なる
手引草なり。

山陽先生の
山紫水明處
賴裏、山陽と
號す。儒者。
居を鴨河の畔
三本木にト
し、山紫水明
處といふ。

澁谷
東京府下豊多
摩郡。

潜—潜

十七日、嫁菜の花一輪咲く。こは、去秋京都に遊び
て、山陽先生の山紫水明處の下なる磧より掘りて來
しものなり。立ちて見る程に、
水の音も心もともにすみゆきて、
月しづかなる賀茂の夜半かな。

と詠みし、その折の清興、水の如く湧きかへり來ぬ。午
後、澁谷の川に鮒釣に行く。水まさりて青蘆を没し、川
柳の偃して小さきアーチを作れるを、心得顔の水馬
ついつい潜り行けば、犬蓼の花搖きて、小さき蛙のざ
んぶと水に飛びこむも興あり。時時、雨ざあとしぶき

て、風景みるみる淡墨の畫になりゆく。傘・蓑笠、そちこちに見えたれど、獲物ありとも思はれず。吾も一尾をも獲ず、蝸に螫されて歸る。

十八日、菊に肥料をやる。花を愛しそめて、いつしか肥料もいとほしからずなりぬ。肥料を愛するにあらず、花を愛すればなり。清濁併せ吞むといふこと、耳の痛きほど聞き知り居れど、わが量狭ければ、異を嫌ひ非を悪みて、みづから世を窄うす。はづかしきことなり。

二十日、朝の程日影さしたれば、貝細工の花いと

なんぢ(爾)

美しく開きたるに、やがて曇りたれば、乾びたる鱗鱗の花弁、見るが内につぼみぬ。またの名を萬年草といひて、盛りの時に摘み、蕊をだに去れば、萬年も色を保つといふ花なれば、少しの濕氣をも厭ふにこそ。心に染むことかな。誰か爾にかくみづから愛惜することをお教へし。

廿五日、晴。夙起、小園を歩めば、蟲の聲清く、杉籬の蛛網露を帯びて、白絹の光あり。撫子花・檜あふぎ・百日草・千鳥草・桔梗・日まはり・金蓮花など濡れそぼちて夢いまだ醒めじと見ゆ。亞米利加白蘇、またの名は水蝶

夢—夢

花を、隅の方に捨植になし置きしに、何時の間にかいと大きくなりて、盛んに花をつけたり。先年の夏、母上の此の花を見て、西洋の花は皆丈夫なり。他に頓著なく、己が咲くべき花を咲かせて逞しきを見給へ」と、いはれし一語耳に響きしより、此の花を見るごとに、其の語を思ひいでざるはなし。夕方、樺色の雲、隣家の桔槔の上に浮びて、蛸の聲涼し。(徳富健次郎)

二六、雑草

雑草こそ面白きものなれ。百坪の庭には百坪の雑

とこしなへ
(長)

草生ひ、千坪の庭には千坪の雑草生ふ。世若し嘉禾良穀のみにて、雑草といふもの無くば、富貴のものは長へに誇りて、貧賤のものは食を得ざるに至らんを、雑草といふもの生ふるが爲に、廣き庭園を造るにも自ら際限あるなり。若し然らざば、百萬坪・二百萬坪の庭園を造りて、おのが驕奢のために、益もなく國土を塞がん者、一代に三人・四人は必ず有るべし。雑草は人間の驕奢に課する租税にやあらんと面白し。

に^じる(躡)

又、雑草こそ面白きものなれ。之を蹂み躡り、之を刈り薙ぎ、之を抜き棄て、之を焼き拂ひても、終に盡き滅

びたる例を聞かず。必ず年年の春夏を我が世顔に生ひ茂りて、あはよくば、人の思を寄する園の花をも逐ひ退け、民の命と頼む稲麥をも虐げて、おのれのみ心のままに蔓り榮えんとす。されば、園丁、農夫少しく此を除き去ることを怠れば、忽ち其の咎を得て、花は色無く、穀は登らざるに至ること、彼の「道高きこと一尺、魔の高き事一丈」といへる諺も思ひ合はせらるるばかりなり。世若し雜草といふもの無くば、能く勤むる者も惰る者も、一度種子を播き苗を植ゑたる上は、皆同じ收穫を得べきに、此あるが故に、勤むるものは善

報を得、惰るものは惡果を得るなり。雜草は人間の怠惰を警むる造化の鞭にやあらんとおそろし。

(幸田成行―潮待ち草)

二七、 豊太閤の逸話

東山
京都の東方一帯の山山。

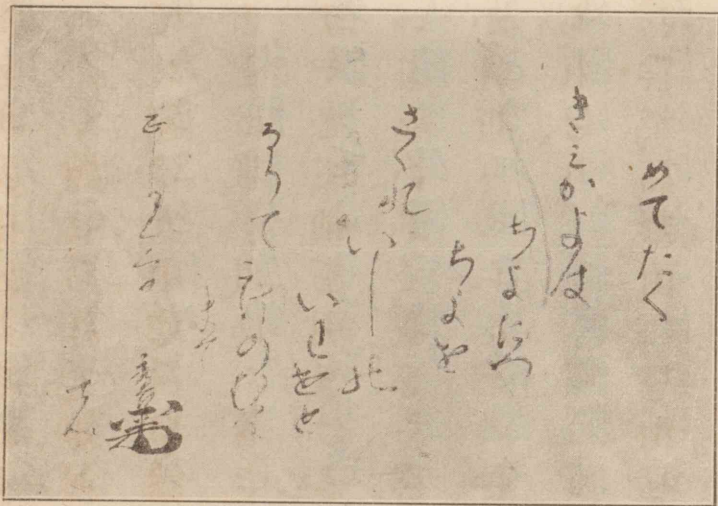
豊太閤、或歲、東山に松茸多く生えたりと聞きて、近日、茸狩を催すべし」と仰せ出さる。役人ども、見分に出かけたるに、早くも諸人わけ入りて、残すくなに取去りけり。かくては興なからんとて、内内、所所より松茸を取り寄せて、巧に植ゑ置きぬ。その日になりて、太

閣は奥女中達數多召し連れて山に登り、茸の多きに
 いたく興ぜられて、如何にも満足の體なり。これを見
 て、お側の女中達は「自然に生えたる茸と人の植ゑた
 るとは、誰が目にも著きものを、殿下は心づかせ給は
 ずや」と袖を引きけるに、太閤はその辭を遮りつつ、
 「いふな、いふな。我等を喜ばせんとして、役人どもは幾許
 か骨折りつらん。その骨折を買はてや」として微笑せ
 られけり。

高野山
 紀伊國伊都郡
 高野山なる金
 剛峯寺なり。

嘗て、高野山に登山せられし時、「割粥を出せ」と仰せ
 いださる。暫ありて、料理人調達してまゐらす。太閤悅

びて、「高野山は白なき所なり。余が粥を食はんことを



豊 臣 秀 吉 筆 蹟

知りて、白を持ち來りし
 こと、料理人才覺の至な
 り」と仰せられぬ。實はさ
 にあらず、俄に多くの
 數にて、俎のうへにて割
 りて調ぜしなり。後に物
 語の時、右の由を申しあ
 ぐれば、太閤怒りて、「無
 くば無し」といひて、常の粥

を出さんに何の仔細かあるべき。わが力にては、一粒
づつ割りて食はんも心のままなれども、さやりの奢
りたることはせぬものなり」とて叱られけり。

太閤は、平生鶴を愛して、苑中に飼はれけり。一日、監
者誤りてこれを取り逃しつ。愕きて罪を請へば、「逃げ
し鶴は外國へ飛び去りしならんか」と問はる。飼鳥の
ことなれば、さまで遠くはえ飛び候はじ」と答ふるに、
「外國に行かねば、何處にありともわが樊籠の中なり。
おけ、おけ」といはれけり。

小田原落城
天正十八年十
月。

かひどり
(飼鳥)

小田原落城の後、一日太田三樂を招いて軍事を談

太田三樂
名は資正。道
灌の曾孫。

ぜしめ、これを傾聴しつ。感歎せられたるが、ややあ
りて、その方は智・仁・勇の三徳を具へたる良將なり。そ
れにひきかへ、我にはその一徳だになし。然るに、不思
議にも、その方は一國だに取りえぬに、我は天下を取
れり。天下を取ることのみは我が得手なりと見ゆ」と
て、放笑せられけり。

一日、伏見にて、太閤は廣間に出でられて、五腰の刀
を見て、試みにその主をあてて見んとて指されける
に、少しも違はず。前田玄以、誠に神智のおはせること
よと驚けば、太閤笑つて、「何の仔細もなきことなり。秀

伏見
山城國紀伊郡
にあり。所謂
桃山御殿な
り。
前田玄以
豊臣氏五奉行
の一人。

秀家
宇喜多氏。
景勝
上杉氏。謙信
の養子。
利家
前田氏。

家は華美を好むゆゑに、黄金を鏤めたる刀、これなるべし。景勝は父の時より長刀を好めり。寸の延びたる刀を、これに當てたり。利家は又左衛門といひし時より、魁殿の武功により、今、大國を領すれども、昔を忘れず。革卷きたる柄の刀、これ他の主にあらずと思へり。輝元は異風を好み、異なる體に飾りたる刀、これならん。家康は大勇にして、劍を頼む心なし。取り繕ひたることもなく、又、飾もなき刀は、その志にかなひたり。これを以て察したるに、違はざりけり」といはれけり。

(福本誠一太閤論による)

輝元
毛利氏。

二八、秋 蟬 (大町芳衛)

園にひと夏 鳴きくらし、

聲もよわれる うつ 蟬の

力もなげに すがれるを、

ねらふ童兒の うたてさよ。」

蟬はかなしき 音にいでて、

やよや、童兒、 今しばし

見逃してたべ、 我がいのち、

わらはへ
(童兒)

心のかぎり 鳴かしめよ。」

つらき野分の 風たちて、

露はしげくも 置きにけり。

残る日影の 消えゆかば、

やがて終らむ、 我がいのち。」

二九、 秋の夜

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は、美しき女の童の髪のごとし。めでたきことは誠にめでたし。な

つかしきことも誠になつかし。されど、なほ聊もの足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るがごとし。清さはあまりありて、味無きに近し。夏の夜の月の團圓と大いなるが、海原の果より、松の樹の間より、または、市中の叢の浪間より出でたる、目ざましく、夜色も快くをかしけれど、ただ、わが魂の世に浮かるるをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸み入るやうなるを覺ゆることなし。

たましい
(魂)

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日六日の月の、いつか夕ぐれの空に出で居りて、雑木

の梢もろこしの垂葉などに、風かすけく叫く、まづおもしろし。遠山黒く暮れて、素月輝を揚げ、庭樹のそれぞれ、闊葉、織葉の葉表の照、葉陰の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽涼清澄の景を醸し出すさま、いづくにもありふれたることながら好し。夜更け、蟲吟じて、世の中靜なる時、たまたま燈前に書をさしおきて、起つて廊を歩むをりから、窓の白きを看て、戸をおし開きて出づれば、月天心に到りて、光華六合にわたり、霜に澄める夜の氣は、水まさに凍らんと欲するが如くなる、身心頓にこの世のものならずな

りたるやりに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月ならではと思はる。(幸田成行)

三〇、小園の萩

我に二十坪の小園あり、園は家の南に在りて、上野の杉を外に控えたり。場末のこととて、家まばらに建てられたれば、青空は庭の外に擴りて、雲行き、鳥翔るさまも、いと豊に眺めらる。始めて此處に移りし頃は、僅に竹藪を拓きたる跡と覺しく、草も木もなき裸の庭なりしを、家主なる人の、小松三本を栽ゑて、やや物

ひかえ(控)

めかしたるに、隣の老媪の與へたる薔薇さへ植ゑ添へたれば、今は四五輪の花に、吟興を催すことも多きやうになりぬ。この二十坪の小園こそ我が籠居の天地にして、數株の花卉は我が病中唯一の詩料なり。

紫雲英の花盛り過ぎて、時鳥の空に訪づる頃、赤白き薔薇咲き満ちて、その色香賞すべき趣なきにあらねど、我が小園の見どころは、まこと萩の盛りにぞあるべき。今年は去年に比ぶるに、萩の勢強く、夏の初枝ぶりさへいたく蔓りて、末たのもしく見えぬ。葉の色も、去年のやや黄ばみたるには似ず、緑いと濃し。

空晴れたる日は、椅子を其のほとりに据ゑさせ、人に扶けられて、やうやうそれに辿りつき、氣晴しがてら、萩の芽につきたる小さき蟲を取りし事も、一度二度にはあらず。桔梗、撫子は實となり、朝顔の花のやや少なくなりし八月の末より、待ちに待ちし萩は、一つ二つ綻び初めたり。飛び立つばかりの嬉しさに、指を折りて、明日は四つ、明後日は八つ、十日目には千にやなるらんと、思ひ設けしほどこそあれ、ある夜、野分の風はげしく吹き出でぬ。安からぬ夢を結びて、明くる朝、日闌けて眠より覺むれば、庭に何やらんののしる聲

つゑ(杖)

す。心もとなく這ひ出でて、「何ぞ」と問へば、今まではさしも茂りたる萩の枝、大方吹き折られたりと云ふなりけり。ひたと胸つぶれて、いかにせばやと思へどもかひなし。かくと知りせば、杖に杖立てて置くべかりしをなど、悔ゆるも愚なり。瓦吹き飛ばしたる去年の野分だに、かうはあらざりしを、今年の風は、萩のための方角や悪しかりけん。この日はいとよく晴れ渡りて、やや秋氣を覚え初めしが、われは例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥とに水を湛へて、折れ残りたる萩の泥を洗ひしかど、空しく足の痛さを増したる

たへて(湛)

ばかりにて、泥つきし枝の尖は、蕾腐りて、終に花も咲かずぞなりにし。(正岡常規一子規小品文集による)

三一、暴風見舞の文

昨夜の大あらし、いかが入らせられ候ひしか。やうやく雲をさまり、日影さし出づるを見候うて、すこし胸しづまる心地致し申し候。さてさて近頃におぼえぬ大あれに候ひしかな。手前かた、屋後にありし栗の木二本は、根を倒さまにして仆れ居り候。風向は何方にて候ひしにか、ただ、西よ

り北より南より、吹きまはすかと思ふやうにて、家のうちには舟にあると同じやうにおぼえ候ひき。さりながら、私方は平家造のうへに、地所も低く候へば、さしての障なく候へども、貴方様は高臺にて、殊に御二階造なれば、いかに當て候ひつらん。塀垣などの損處もあらせられずや。氣づかはしく存ぜられ候ふまま、取りあへず伺ひ申しあげ候。かしこ。

同 返事

早速御人にて御たづねいただき、有りがたく候。

仰せのとほり、昨夜は生きてる心地もいたし候はず。戸障子のきしむ音は、塀垣のたふる響に合ひて、屋根も柱も引きぬきもてゆかる事と、覺悟をきはめ申し候ひき。折から、父は昨日の土曜よりかけて、近郷の秋を探りにと、一夜の旅に出で申し、留守はただ老人と女子ばかりゆゑ、いかげせましと、つひに覺えぬおそろしき心地いたされ候ひしが、追ひ追ひ出入りのもの集まり、家には支柱をし、屋根には物を置きなど、かひがひしく致しくれ候ひしかば、それに少し心強く

かひがひし

なりて、あけ方よりは、やうやく物覺ゆるやうに
相成り候。今朝見候へば、仆れしはまはりの扉と
垣とばかりにて、門前の長屋も、うらの物置も、破
損と申すほどの處もなく、さては、驚の方おびた
だしかりしかと、われながらをかしく存じ候。御
宅の裏なる栗の木も、仆れ候ひし由、惜しき事あ
そばされ候。私かた、柿の實ことごとく、落ち候う
て、大かたは疵つき候へど、中にて満足なるを選
りて、御妹子様がたの御慰にさし上げ候。くれぐ
れ、御同様に事なく濟みつるは、何よりに御座候。

こず(疵)

御家族皆皆様へ宜しう御禮願ひたく候。かしこ。

(樋口夏子)

三二、太古の洪水その一

太古の洪水に關しては、東洋にも西洋にも、多少似
通つた傳説がある。

先づ舊約全書に據ると、人の住む世界も、日月・星辰
も、晝も夜も、雲霧も海陸も、草木も鳥獸・蟲魚も、悉く全
智全能の神が、七日間で創造したのである。神はなほ
最後の日に、己が形に象つて、アダム・イヴといふ男女

の人間を造つた。しかるに、二人は悪魔に誘惑されて、神の誠に背いたため、樂園を逐はれて、あさましい世を送ることとなつたが、其の子孫は追ひ追ひに繁殖した。そこで、神はアダムの子孫に、「若し此の年ごろ犯した罪を悔いて、向後、心を淨く世を渡るならば、現世を安樂に暮させた上に、死後は天國に生まれさせよ」と諭したが、其のかひもなく、悪魔が播いた罪惡の種はますます蔓つて、人間はいよいよ墮落するばかりであつた。

そこで、神は大いに怒つて、大洪水を起して、人間は

國一箇

勿論、生物一切を滅してしまはうと思ひたつたが、唯一人ノアといふ敬神の心の深い正直者のみは、さすがに殺すに忍びないので、豫め大洪水のある事をノアに知らせ、家族一同方舟ほこぶねに乗つて難を避けよ」と命じた。ノアは大いに驚き、早速此の事を同胞一同に知らせ、神にわびよ」と諭したが、一人として聽くものもなく、其の豫言を信ずるものもなかつた。

其のうちに豫言の日は迫る。もはや是非に及ばぬ。ノアは取り急いで方舟をこしらへ、その中に一族残らず乗り込み、なほ必要な器具・食料を積み載せた上

つがひ
(番)

に、鳥獸類各、一つがひづつを乗せた。
一週間たつと、果して雨がふり出した。大瀑布を切つて落すやうな凄じい雨が、四十晝夜、間斷なしに降つた。見渡すかぎり、忽ち一面の大海原となつて、田も畑も村も森も沈んでしまつた。ノアの方舟は次第次第に高く浮かんた。衆人は今更に驚き周章てて救を求めたが、もう仕方がない。彼等は丘へ丘へと駆け上つて逃げようとしたが、其の丘も其の山も、大雨は容赦なく波の底に葬つてしまふ。ありとあらゆる生物は残りなく洗ひ去られて、目に入るものは漠漠たる

はうひる
(葬)

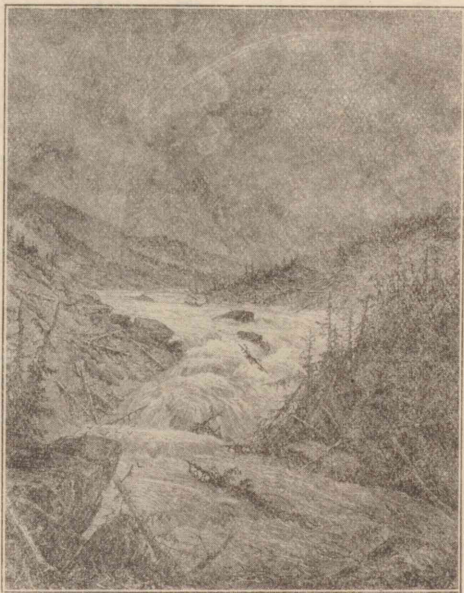
黒雲と、漫漫たる濁浪ばかり。

終に雨が歇んで、水嵩も次第に減じた。ノアの方舟は、百五十日間、何處をよるべともなく漂つてゐたが、とうとうアララットといふ高い山の頂に留まつた。さて、そこに二月餘り留まつてゐる中に、水は愈、退いて、他の山や丘もだんだんと顯れて來た。

ノアは船の窓を開いて、試みに鳩を放して見たが、まだ居處がないと見えて、やがて歸つて來た。一週間たつて、又放して見ると、夕方になつて、嘴に橄欖の葉を啣へて歸つて來た。水がやや乾いたためであらう。

嘴
—
背

更に一週間して、又放して見たが、此の度は歸つて來なかつた。



きづいて
(築きて)

心してこの土に住み、正しい心を長く子孫に傳へよ」と告げて、其の誓約のしるしにとて、天の一方に美し

日を経て、ノアの一族は、鳥獸までもつれて上陸し、やがて、拜壇を築いて神恩を謝した。神は、以後はこのやうな事はないから、安

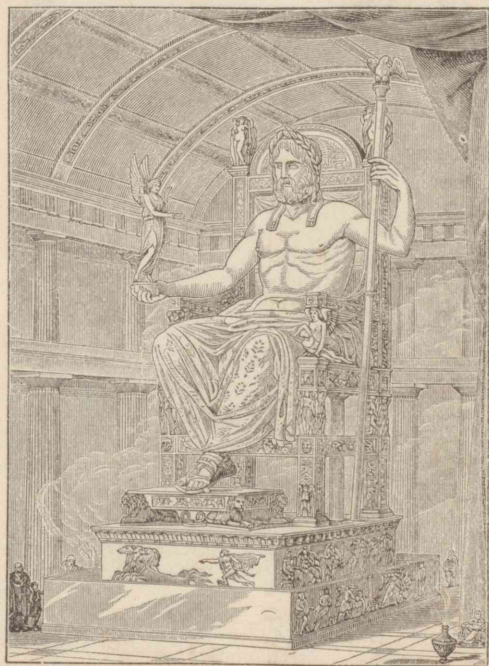
いものを掲げた。それが虹のはじめだともいふ。ノアは九百五十年まで生きてゐた。今の人間は何れもノアの苗裔である。

三三、太古の洪水 その二

以上は猶太國の古代の傳説であるが、太古に大洪水のあつたことは、希臘の神話にも見え、又、支那の歴史にも見えてゐる。

希臘では、人間がだんだん繁殖するにつれ、罪惡が年年歳歳に甚だしくなつて、如何ともしがたいので、

ジュピターといふ神の王が、神通力を以て大洪水を起し、一擧して人類を絶滅して了はうと計畫した。す



像神 - タビユジ

ると、人間の保護者にデューカリオンといふ者があつて、ちやうどノアと同じやうに、いろいろと人間を諭して誠めたが、聴く者も無い。詮方なく、自身だけの用意に、丈夫な船を拵へて待つてゐると、果して大

ひろつて
(拾ひて)

洪水が起つた。デューカリオンも、妻のピルラと二人、その船に乗つて命を助かり、水が退いてから、二人でバーナッサンといふ高山を下りかけると、マーキュリーといふ神が天降つて来て、後から聲をかけ、「御身等が母の骨をば、肩越しに後へ投げよ」と告げた。

二人はこの謎を解いて、我が母とは大地の事であらう、母の骨とは地上の石の事であらうと、早速石塊を拾つて、手に手に肩越しに後へ投げると、不思議や、デューカリオンの投げた石は、忽ち一人の男と化し、ピルラの投げた石は女と化し、投げるにつれて、見る

見る數十人の若い男女が出来たので、ヂューカリオン夫婦は大いに悦び、その首長となつて、山を下り、田畑を開き、村落を作つて、やがて社會を再造したといふ。

さて、又、支那の大洪水の事蹟は、今より凡そ四千年も昔の事で、前の二つの洪水程には劇しくはなかつたらしいが、止んでは起り、起つては止み、年月も長い間、面積も處處に互つて、被害も中中甚だしかつた。

それは有名な聖天子、堯舜の時代であつた。はじめ鯀といふものに命じて、この洪水をきり落す經營に

當らせたところ、數年を経て何の功も擧らないので、更にその子の禹に命じた。禹は身を勞し、思を焦し、山野の間を奔走すること十三年、我が家の門を過ぎて、も立ち寄りぬ程の熱心を以て、一意治水の爲に力を盡し、九州を開き、九道を通じ、とうとうさしもの大氾濫を切り落すことを得たといふ。

これらの古事は、全くの根なし事とも思はれぬ。太古は、大噴火・大地震・大海嘯・大洪水など、地文上の大厄が實際頻繁であつたらしい。(坪内雄藏)

三四、水は萬物の慈母

水は萬物を生育する慈母なり。水無くんば、草木禽獸一切の生物は、皆悉くその生命を失ひて、全地球は一大沙漠となり果てんのみ。われ等の母が、臺所に出でては食物を調理し、座敷に在りては衣服を裁縫し、われ等のために、ひねもす身心を勞し給ふとひとしく、水も亦間斷なく地球の表面を潤澤して、溪流となり、江河となり、遂に海に注ぐ。かくて、水蒸氣となりて空中に昇り、降りて露となり、雨となり、更に河海の源泉となり、絶えず循環して、寸時も休むことなし。

地球の表面の四分の三は海なりといふ。しかのみならず、陸上にも湖澤、河泉の類、山巔、林隈、到る處に在り。これらを合すれば、水の面積はなほいよいよ多かるべし。地球上の萬物は、實にこの水の慈惠によりて、生育繁殖することを得るなり。

あらゆる生物は、其の居所を變ぜずして、常に空氣を呼吸することを得れども、水を得んがためには、なほ、往往遠隔の地に行きてこれを求めざるべからず。何となれば、溷濁せる水、若しくは海洋の水は、直に飲用に供すること能はざればなり。故に、飛禽はその兩

翼により、走獸はその四肢によりて、或は湖畔に群り、或は溪流に飲むを常とす。

されど、草木はなほ禽獸の如く、自らその居處を轉ずること能はざるを以て、その根によりて、地中の水を吸収して以て滋養となす。

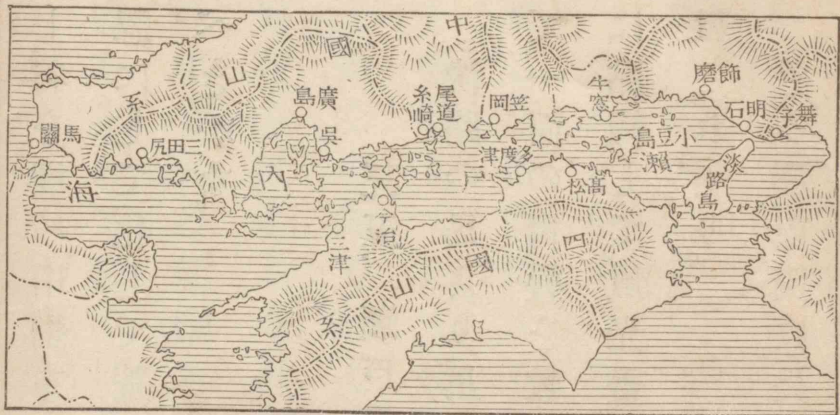
かくの如くにして、水は萬物を生育し、日夜にその繁殖をはかる。されば、水ある處には草木繁茂し、禽獸群集す。天の配劑も亦妙ならずや。人若しこの天の妙機を忘れて、濫りに森林を伐採して、水源を涸渴せしむるが如きことあらんか、洪水頻りに至りて、山を崩

し、谷を埋め、田畑を流し、人畜を傷ひ、渺茫たる沃野は、忽にして化して荒涼たる一の沙漠となるべし。恐るべきかな。

三五、瀬戸内海

淡路の島より馬關に至るまでの間、内海波靜にして、一面の青疊を敷きたるが如く、大小の島嶼その間に點綴して、風光畫けるが如し。世に瀬戸内海といふはこれなり。

その形、東西に長く、南北に狭く、長さおよそ百二十



里幅一里半より十五里に及べり。北には中國の山系蜿蜒として、山陰・山陽兩道の界に横たはり、南には四國の山系連綿として、四國の中央を劃せり。その昔は、今の中國と四國とは、陸地によりて相聯絡せしものなりしを、海水の侵蝕、地下の變遷によりて、いつか相分離して、中間の陸地は全く海中に陥没し、かく

て、ここに瀬戸内海なる多島海を化成するに至りしなりといへり。しかして、その島嶼および沿岸の岩石は、多く花崗岩より成れり。

畝一畝

春霞淡路の島山をこむるところとなれば、山影淡く空中に消え、一望の麥畝は遠く浩蕩たる碧浪の末と相接し、農家・漁舍その間に隠見せる風景、まことにいふべからず。やがて、東南風の季節となれば、風は四國中央の山系に支へられて、その餘波のみかすかに來り、海面は浪ゆるやかにして細紋を織り、夜に入りては、皎皎たる玉兔その間に躍り出でて、波に映ずるさ

艶—豔

ま、閃閃として金蛇の走るが如く、その清艶爽涼譬ふるにもものなし。やうやくにして秋氣長空に満ち、風霜島山を侵せば、林樹或は黄に、或は紅に染めなして、宛ら錦繡を曝せるが如し。殊に小豆島ゴトシマなる寒霞溪の紅葉を以て勝れりとす。秋もいつしか過ぎて、嚴冬の節となれば、積雪の白色は、花崗岩の白色と相映じて、益その光を添へ、風趣更に一段の美を加ふ。春夏秋冬、その風光のつきざること此の如し。而して、一たび舟をこの間に行らんか、海は島嶼に圍繞せられて、波浪の靜なること、恰も鏡面のごとく、路は忽ち窮まるが如

岩—巖

關—關

くにして忽ちまた開き、島轉じ海廻りて、又その盡くるところを知らざらんとす。宜なり、歐米人のこれを激賞して、世界の絶勝と呼ぶや。(志賀重昂—日本風景論)

三六、愛郷心

我が故郷を慕ふ情は、われ人共に變らぬことにて、東西の別あるべくもあらず。されば何處の國人も、皆我が故郷の美を説かざるはなく、一たび郷關を出づれば、堪へがたき望郷の念にうたるといへり。

嘗て、青が島といふ南洋の一孤島に、火山爆發のこ

とありき。火光燄燄として天を焦し、はては石をとばし灰を降らしければ、島中の人畜、これがために悉く斃れて、僅に十餘人の八丈島に逃るるを得たるのみ。しかも、この十餘人は、遂にその故郷を忘るること能はず。火のやむと聞くや、喜び勇みて、またその恐るべき噴火の島に歸れりといふ。

占守島は千島の内にあり。窮北不毛の地にして、ただ冰雪の極目皚皚たるを見るのみなれば、開拓使廳は土人に令して、南の方色丹島に移住せしめたり。色丹島は、溪流潺湲として樹林繁茂し、鳥獸その蔭に集

まり、田園の收穫また頗る多き樂土なり。さるを、移住者は、皆この樂土に留まることを喜ばずして、歸心矢の如く、遂に相率ゐて、再びその故島に逃れ歸らんと謀りきといふ。

往年、米國シカゴ博覽會の擧ありし時、その中に、エスキモー土人の部落を置き、數多の土人を伴ひ來りて、そこに住ませたることありしが、彼等は、この文明繁華の地にありて、衣食に住居に、無限の快樂を享けながら、なほも故郷の空忘れがたく、幾度もその冰山雪嶺の絶境に逃れ去らんことを企てたりといふ。

まことにもろきは人の情なり。いかなる他郷の樂土も、故郷の住みよきに比ぶれば、物の數にもあらず、何處の國人も、皆その口を極めて、わが故郷の美を説き、望郷の念に驅らるるも、おもへば止むを得ぬことなるべし。

されど、これらは、ただ單に故郷を戀しといひ、忘じ難しといふに過ぎず。我等は、更に我が故郷に向つて、まことの愛情をささぐべき務あることを思はざるべからず。いかにせば、我が故郷の名を著すべきか。いかにせば、我が故郷の名を世界にも耀かし、後の世に

コルシカ島
地中海岸にあ
る小島。

も傳ふることを得べきか。これ、その郷人の、朝夕に忘るべからざる務なり。最爾たるコルシカ島の名は、ナポレオンによりて天下に著しく、尾張の國名は、豊太閤によりて國史に昭昭たり。これらは、まことにその郷里に忠愛なる適例にあらずや。

そもそも郷を愛する念は、やがて國を愛する心なり。國を愛する心は、やがて我が金甌無缺の國體を無窮に傳ふべき道なり。一郷に人たり、一國に民たるもの、その郷國を慕ふ情を進めて、更にその郷國を愛する情を長養せざるべからざるなり。

(落合直文—中等國語讀本)

改訂高等女學讀本卷三終

大正五年一月二十七日
 大正四年十一月十三日
 大正四年十月十五日
 大正四年九月十五日
 大正四年八月十五日
 訂正發行
 訂正發行
 訂正發行
 訂正發行
 訂正發行

改訂高等女學讀本
 定價
 卷一より各金參拾貳錢
 卷四まで各金貳拾八錢
 卷五より各金貳拾八錢
 卷十まで

圖書

著者 佐藤 球
 著者 鹽井 正男

發行者 株式會社 明治書院

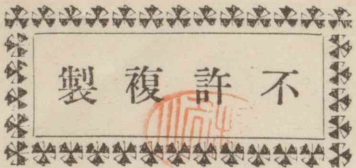
取締役社長 三樹 一平

東京市京橋區西紺屋町廿七番地 仙葉 元太郎

印刷者 株式會社 英舍

東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所 株式會社 英舍



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話本局二四三八番



